

デジタル社会におけるリアル

理事 小原 好一

私が大学に入学した昭和 43 年（1968 年）を思い起こすと、日米安全保障条約改定を巡る反対運動（安保闘争）、ベトナム反戦運動に代表される学生運動の最盛期であり、1 年次は殆ど勉強をした記憶がない。キャンパスは学生運動を行っている学生達に占拠され、授業も殆ど行われず、試験の代わりにレポートを提出したことを記憶している。そして、昭和 44 年（1969 年）は安田講堂事件の勃発により東京大学の入試が中止となった。



混迷を極める当時の社会に身を置きつつも、私は所謂ノンポリ（nonpolitical の略）であり、クラブ活動のテニスに打ち込む一方で、流行していた海外一人旅に憧れの念を抱き、学生時代に実現するために、卒業論文を 4 年次の 10 月までに概ね書き上げ、指導教授の許しを得てリュック一つで欧州へ旅立った。1 ドル 360 円の時代であったため、現在より海外旅行のハードルが高かったものの、横浜からソ連（当時）のナホトカまでは 3,000t クラスの船舶で渡航し、ナホトカからハバロスクまではシベリア鉄道を選択した。そして、ハバロスクからモスクワへの移動は航空機を利用し、モスクワからオーストリアのウィーンまでは再び鉄道からの車窓を楽しみ、ウィーンから鉄道でイタリアのミラノ、バチカン市国を含むローマに立ち寄り、フランスのコート・ダジュール、スペインのバルセロナ、マドリードを訪れ、パリを経由してウィーンに戻り、航空機で羽田に帰国した。約 50 日間の一人旅であり、今でいうバックパッカーである。

当時のソ連は共産国であったがゆえに一人で自由に旅をすることができず、10 人程度のパーティーを組まされ、現地のガイドがつき、ガイドが案内する以外の場所は訪れることが適わなかった。ソ連以外の国は、日本で予め購入しておいた周遊券をもとに、心の趣くままに旅路を満喫した。ソ連以外の国の宿泊は、安価なホテル、ユースホステルが主体であり、あるホテルでは、冬なのにお湯が出なかったことも今となっては良き思い出である。

欧州における多様な文化、風土から新たな示唆を得て、現地の方々との交流から刺激を頂く一方で、今までは空気のような存在であった日本の安全保障、治安、清潔感などの素晴らしさを心底から実感することができた。また、当時は考えが及ばなかったが、私が欧州を旅した 1971 年は第二次世界大戦の終戦から僅か 26 年後である。終戦時の様子は写真或いは映画で知るばかりであるものの、戦後の復興、高

度成長を短期間に成し遂げたわが国の底力を、時間を軸として変化を紐解き、地理を軸として相違を把握することによって、リアルに受け止めることができた。

また、当時と現在を比較すると、技術の進化に伴い、発明・発見のスパンが劇的に短くなりつつあり、且つ世界的な普及のスピードも加速していることが読み取れる。ゆえに、これからの時代においては、社会の潮流をいち早く見通して、自己実現への糧にすることが、より一層重要になる。IoE (Internet of Everything) の進展に伴い、世界中のあらゆる情報を瞬時に入手できるようになる一方で、デジタルへの依存度が高まるに従って、世界のリアルを探究する行動力を備え、リアルな世界でしか得ることのできない気づきへの感性を磨くことがプライオリティになると私は思う。

次世代を担う檜の芽会会員の皆様には、より豊かで実りある人生を送るために、デジタル社会においてさらなる輝きを放つリアルの価値を体得するべく、特に世界各地に足を運ぶことをお勧めしたい。

前田建設工業株式会社 相談役